「神に倣う者」

エペソ人への手紙５：１－２

September.8.2024

エペソ人への手紙５：１－２（パワポ）

Preface

久しぶりのエペソ書になります。

これまでエペソ書４章の御言葉を通して、「キリストを信じる者とされたならば、どう生きるのか」、「具体的に、神を愛するということが、隣人を愛するということに繋がり実践されないならば、それは、神を愛するということの意味を分かっていない」ということを教えられました。

ある意味これは、聖書が指摘する最も怖い内容のようにも思えます。

エペソ書５章の内容に入っていきますと、４章で語られたことに続いて、さらに深く掘り下げて行きながら、キリストを信じる信仰者たちに求められる神様の要求、または期待、約束が見えてきます。

５章６章と読み進めて行きますと、キリスト者の信仰生活とは、結局のところ何の戦いであり、何をもってその戦いのために武装し、どこに焦点を合わせていくべきなのかということを教えられます。

私たちの戦いは、血肉に対する・物質世界に対する戦いではなく、霊的な戦いであるということを、５章６章を読み進めて行きますと遂に知るようになっていきます。

私たちの信仰生活は、ともすると、倫理的道徳的善行的なものを如何に積み上げていくのかという戦いや比較にばかり気が行ってしまいがちかもしれませんが、エペソ書５章６章を丁寧に読み進めて行きますと、キリスト者の信仰生活とは、所謂道徳性や善行（良い行い）という外面的に表れるものを遥かに超えた、地上のことではない遥かに高い天のこと、霊的な問題であるということが見えてきます。

そして、それが見えたならば、遂に私たちは、よりキリストを信じる者らしい祈りをもう少し深く祈るようになるでしょうし、私たち一人一人の存在が土浦めぐみ教会という小さな一教会だけでなく、一時代、一社会において重要な役割を担っている存在であるんだということに気付されることでしょう。

あたかも、ソドムとゴモラが滅びる前に１０人の義人正しい者たちがその社会に、その世界に求められたように、この時代において、この国において、この世界において神様が求めておられる義人として、私たち一人一人が神の御前に呼び出された存在であるということを知り、知ったならば祈り、深い霊的味わいを味わわせて頂けるところへと導かれていることを、エペソ書５章６章を読み進めて行く中で悟らされたいと期待しております。

Part One

エペソ書５：１を見ますと、このように始まっています。

エペソ人への手紙５：１（パワポ）

ここにある「神に倣う者となりなさい」という言葉は、より正確に言うならば、「神に形どられた者になる」というような意味合いになります。

「形どられた」というのは、型に鉛のようなものを流し込んで、同じ形のものを作り出すということです。

つまり、「神に倣う者となりなさい」というこの言葉は、「神さまに従っていく」という程度のものではなく、「神に形どられた」と、ただただ驚愕するしかない程の有り得ないことを要求されているということが分かります。

もしこの御言葉を、キリスト者の責任または義務という観点で捉えるならば、負担でしかないでしょうし、心が重い不可能な要求にしか思えなくなってしまいます。

「神に倣う者となりなさい」という言葉を自らの身に、自らの力で興させようと決意した瞬間から、挫折しか生じなくなってしまいますね。

じゃあ、この言葉をどう解釈すべきなのか？

エペソ２：１０に、「私たちが行う良い行いさえも、私たちの風采や人柄が為すものではなく、その良い行いさえも神様があらかじめ備えて下さっているから出来るんです」とありますが、この御言葉は、自分では何も出来ないんだけれども、あたかも自分の力だけでハイハイやヨチヨチ歩きをして満足げにしている幼子を見守り、その達成を共に喜び、そのハイハイやヨチヨチ歩きに必要な者を予め備えながら、我が子から決して目を離さない親のようなお方が神様であるということを教えてくれます。

つまり、「神に形どられた者、倣う者となりなさい」という御言葉は、神様が私たちに責任として、義務として、仕事として、やるべきこととして求めなさっている要求ではなく、神のご計画、神の意図、何としてでも成し遂げるという神の意志、そして私たちと一緒に叶えていく約束の思いが込められている御言葉だと見ていっていいのかなあと思います。

Part Two

ここで一つ皆さんに質問したいと思います。

キリスト信じる信仰者として生きて行く中で、感謝や感激と、挫折や嘆き悲しみのどちらの方が多いでしょうか？

信仰生活の中で経験する事は、喜びと苦難、どちらの方が多いでしょうか？

「御霊の実は愛、喜び、平安」、または、「いつも喜んでいなさい。すべてのことに感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです」という御言葉ゆえに、キリスト者の信仰生活は、いつ

も喜びの連続ばかりであるという誤解とともに、現実問題、「そうではない」という葛藤に苛まれることがあるように思います。
　もちろん、神さまは結局のところ、結果的に私たちを喜ばせて下さり、たとえのようのない感激の経験を与え、それを成すために介入され、関わり続け、奇跡としか表現出来ないような中へと導いて行かれますが、その過程の道程の大部分の時間は、挫折と痛みと苦難の中を通ります。
　旧新約聖書を読んでいっても一目瞭然ですし、私たちの信仰生活を振り返っても明白な事実だと思います。

　では、なぜそうなのか？
　神に倣う者として、神に形どられた者に私たちを直して行く中で、先ずは取り除いて、はぎ取ってしまわなければならないものの方が遥かに多いからですね。

　神さまが「与える」と、「受け継がせる」とお赦しになられたものを私という人が受けようとすると、あたかも私たちが何かを接着剤でくっ付けようとする時、その元あった所を綺麗に拭いてからくっ付けなければ剝がれてしまうように、私たちが神様から良いものをそのままでは受け取ることが出来ない存在であることを感じるようになります。
　新しいぶどう酒は新しい革袋の中に入れなければなりませんが、新しい革袋が私たちの中に準備されていないことを見て、しょっちゅう挫折します。
　「あなたは愛されています。神様はあなたのことを愛しています。あなたは**そのままで**神に愛されています」ということが語られることがありますが、全体的に、包括的に、最終的に見て間違っていない表現だと思いますが、まかり間違うと、落とし穴にも成りかねない言い回しだと思います。
　実際のところは、神との関係が深まれば深まるほどに、そうであることに感謝だなあと思う反面、違和感を覚えるようになるでしょう。

　でも、その違和感こそが信仰者であることの証でもあるでしょう。
　信仰が深められ、進められて行けば行くほどに、言いようのない感謝と共に、「私は罪人です。罪人のかしらです。最も小さな者です」という絶え間ない自らのうちに住んでいる悪、罪、不義を見出さずにはいられなくなっていきます。
　私たちの信仰生活は、ある意味、「私は罪人です」という告白によって結び合わされて行っているものなんだとも言えるでしょう。

　神様が私たちに既に与え、これから与えようとしておられるものは、あまりにも聖く、聖で、豊かで、大きく、膨大であります。
　それを前にすると、自分の姿が全くもって相応しくないように思えてしまう程ですが、それでも神様は、「神に倣う者、神に形どられた者になりなさい」という約束とともに、そんな私たちの足りなさ、未熟さ、罪深さを十分に承知されながら、私たちのことを試して合格か不合格かを決めるために「神に倣う

者になりなさい」と語り掛けておられるのではなく、愛する子どもを見つめる愛に満ち溢れた眼差しで語り掛けて下さっている言葉なんだということに生ける希望を覚えるわけですね。
　エペソ書５：１を見ますと、「神に倣う者となりなさい」という御言葉の前に、

エペソ人への手紙５：１（パワポ）

「愛されている子どもらしく」という言葉が出てきます。
「あれが出来たら、これが出来たらわたしの子ども」ではなく、「神に倣う者となりなさい」という言葉は、もう既に神の子どもだからこその期待であり、神とともに成していく約束であり、私たちをもってして、何者なのかを忘れないようにという聖別の、「聖なる者とした」という神の宣言が込められている言葉なんだと思うんです。

　私たちのみでは、到底そこまで到達することも、その境地に至ることも出来ないということをよくよくご存じでありながらも、「神の子である」という宣言とともに、「神に倣う者になりなさい、神に形どられる者となる生き方を全うしなさい」と仰います。
　まあそれでも、自信がないというのが、私たちの正直な思いかもしれませんが、イザヤ書５５章に、「神さまが一度発した言葉は決して空しく終わることはなく、必ずや成し遂げられる」という御言葉があります。

イザヤ書５５：８－１１（パワポ）

「神に倣う者となる」という約束の言葉は、私たちの挫折や心配や反応を遥かに超えて成し遂げられて行くことでしょう。
　それゆえに、私たちの足りなさや自信の無さにも関わらず、神の言葉は成就するという事実とともに、「神に倣う者となりなさい」という神の要求を真摯に受け止め生きようとするならば、怖さはあっても、感謝することが出来るでしょう。

Part Three

　こう考えますと、「神に倣う者となりなさい」という御言葉は、一方的な命令や要求という面よりも、約束に近いものなのかなあと思えてきます。
　約束というのは、約束を交わした一方のみが守れば成されるものではなく、約束を交わした両方が守る務めを果たしてこそ、その約束は成就するものです。

　ならば、「神に倣う者となりなさい」という約束を、私たち側が守り果たすために必要な信仰生活の中で最も大事なことは、神を知っていくことですね。
　神というお方がどういうお方なのかを知ろうと努めていく必要があります。

意外にも、自分の訴えばかりが先んじてしまい、神を知るということが私たちの信仰生活において、ぼかされてしまうことが少なくないように思います。

神を知るという過程の中で、私たちは聖なるものや、義なるものや、正しいことを知っていこうと努める必要があると思いますが、その聖や義や正しいことを、神の愛や神の赦しや神の品性のうちに求めないならば、事実上神無しの、社会通念的な善や正義や倫理観や道徳などと何ら変わらないような、人や物事を裁く規準や、「こうすべきだ」という律法や宗教心となって、人を切り捨てる人格的に殺してしまうものとしてしか表れなくなってしまいます。

キリスト教信仰において最も大切な神様から私たちへの要求は、「善なる人、正しい人になりなさい」ということではなく、「わたしがあなたをわたしの子とする、した」という自覚です。
つまり、正しいか正しくないのかが、その人の存在の何たるかを決めるのではなく、どこのうちの子なのかということが、先ずその存在の何たるかを決めるということです。
うそもつくし、悪びれることもないし、ちょっとどころかかなり難ありだけれども、あの家のあの人の子どもであるということには変わりないという、無条件の愛と赦しの中にあるアイデンティティこそが、キリスト教信仰において最も大切な告白となります。
そして、そのアイデンティティーに相応しく変えていくというのが、父なる神様と私たちの間で交わされた約束であり、その約束を守るために私たちの方も努めていくべきことがあるということですね。
このことついてイエス様が教えて下さっている聖書箇所があります。

ヨハネの福音書１３：３４－３５（パワポ）

愛という言葉は、ある意味私たちにとって慣れ親しんだ馴染みのある言葉であるがために、聖書が要求している意味合いと私たちが思っていることに違いが生じてしまう余地が多様にあると思います。
イエス様は、愛をどの次元まで、どの程度まで求めておられるかと言いますと、「あなたがたが互いに愛し合うことを見て、他の人たちがあなたがたがわたしの弟子であることを認めるようになる」というところまでです。
これまた、大きな期待の籠った要求ですね。

我が家にも子どもたちがいますが、子育てをしている親として恐れと言いましょうか、不安になるのは、どんなに外面を装ったとしても、親の姿が子の姿に投影されてしまい、子を見ればその親が見えてしまう、どんな家庭なのかが見えてしまうということです。
私たちを見て、私たちを子とされた方が愛なるお方である、赦しに富み給うお方である、待つことに長けたお方である、忍耐深く、寛容で、誠実なお方で

あるということが表れないならば、未だに私たちが進んでいる道が間違っているかもしれないという指摘をされながら、「愛するという道を進むよう」イエス様私たちに求めておられます。
　そうは言っても、やっぱり簡単なことではありません。
　マタイの福音書５章に行きますと、このことをさらに掘り下げて仰います。

マタイの福音書５：４３－４８（パワポ）

　（ここに「父の子どもになる」という言葉が出てきます）
　とんでもない神様からの要求です。
　「神に倣う者となりなさい。神に形どられた者となりなさい」ということが、どれほどに難しいことであり、怖さをも覚える程の御言葉だということをこのイエス様の言葉から感じずにはいられません。

Part Four

　私たちの信仰が、何ゆえに躓くのかを考えますと、「何が正しいのか」ということにこだわってしまうがために躓くことが殆どように思います。
　私が正しいと感じたこと。私が間違っていると思ったこと。
　「正しいから怒ってもいいし、正しいから裁いてもいい。なぜならば、相手が間違っているから。」
　でも、イエス様は、聖書は、キリストを信じる信仰においては、正しいことや何が正しいのかを要求してはきません。
　人間誰一人として正しい人なんかいないからですね。
　神から正しさを求められても、私たち人間すべて真っ黒です。
　もう、そういう物差しで人を計ったところで、何も出て来ないのが私たち人間、罪人です。

　私たちが正しいから神の子となった、されたわけではありません。
　私たちが他の人たちよりも正しくて優れていて、神の子となったのではなく、神様が私たちのことを可哀そうに思い、哀れんで下さり、赦して下さり、愛して下さったがために神の子とされました。
　だからイエス様は、「キリスト・イエスにあって父なる神が私たち愛しておられるように愛しなさい」と仰るんです。

　私たちの偽善に満ちた生半可な基準では、善人と悪人という区別のみを生じさせてしまいますが、神さまの前にあっては善人も悪人も、クリスチャンもノンクリスチャンもありません。
　どんな人にも太陽を昇らせ、雨を降らせて下さるお方が、天地万物をお造りになられた愛の神です。
　それゆえに、私たちは、どんな人に対しても裁くことをせず、見下すこともなく、可哀そうに思い、弱さに同調し、愛すという道を進み選び取って行くこ

とを諦めるわけにはいきません。
　その人が罪人であるならば、私も同じ、いやそれ以上の罪人であるということを覚えなければならないですね…
　その人を劣っていると見なしたり、軽蔑したり、取るに足りない人だと、心に優越感を覚えたりすることほどに大きな罪はないということを知らなければならないですよね。

　でも、これも、そんな簡単なことではありません。
　キリスト教は愛だと私たち言いますし、確かにキリスト教信仰は愛です。
　ですが私たちは、どれだけ愛するに相応しいと思える人だけを愛してきたことでしょうか。
　他と比較してどうのこうの、あの人がどうのこうの、私たちの教会がどうのこうのと言っている余地なんか、私たちには実のところないように思います。
　私たちにもっと必要な祈祷課題は、私たち、私自身なのかもしれません。
　「本当に私は愛しているだろうか？　罪がどれほどに怖いものであることを分かっているだろうか？　罪の前にあっては全くもって無力であることをどれほどに分かっているだろうか？」
　これこそが、私たちにとって最も大事な祈りの課題であり、聖書が一貫して語り続けていることだと思います。

　でも、こんな大事なことを差し置いて、正しいと正しくないを区別することばかりに気を使い、良い人なのか悪い人なのかばかりに心を向け、どれだけ熱心なのか怠惰なのかばかりに気を取られ、それらを判断することが信仰的行為だと錯覚してしまうことがありますが、それは信仰ではなく道徳です。
　自分を好いてくれる人を好くこと、気の合う人を愛すること、自分の仲間や子どもや家族を愛することを、聖書は、イエス様は、愛とは言いません。
　本能であり、ある意味責任ですね。倫理的責任です。

　そして、聖書が私たちに語る愛とは、「敵を愛しなさい」ということです。
　敵を愛する…　でも、何と不可能なことでしょうか。
　敵に復讐をしないことだけでも、立派なことだと思います。
　敵を憎まず復讐をしないということだけでも十分かもしれませんし、あらゆる忍耐の限りを尽くさなければなりませんし、全神経を使わなければならないほどに、私たちは無力です。

　そうして、そこで、私たちが何を学ばせられるのかと言いますと、まだまだ自分に死ぬことが出来ていない、キリストとともに十字架に架けられ私は死んだとは言うものの、キリストを踏み台にして、私を生かそうとするキリストとともに死に切れていない細胞・ＤＮＡが未だに体中に満ち溢れているということを学ばせられます。

「どうして神様は、私たちが望んでいるように、満足するようなところへと導いて行って下さらないのか？」というような疑問が常日頃付いて回るかもしれませんが、私たちの弱いところを、罪深さを、足りなさを私たち自身に確認させるためですね。
出エジプトをして４０年間の荒野生活を生きたイスラエルの民たちに、神様が仰った言葉、

申命記８：２（パワポ）
あなたの神、主がこの４０年の間、荒野であなたを歩ませられたすべての道を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試し、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。

というこの御言葉は、私たちにそっくりそのまま当てはまる言葉でしょう。

Part Five

私たち毎週の礼拝の中で主の祈りを祈りますが、皆さん毎回、引っかかる言葉はないでしょうか。
「私たちの負い目をお赦しください。（ここまでは大丈夫です。でもその次）私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦しました。」
毎回、嘘をついています。

私たちの感情、理性、人格、私たちが持っているありとあらゆるものをもってしても、「敵を愛しなさい」というイエス様の仰る愛をもって自分自身を吟味しても、合格ラインには程遠い自らの姿を見て、再び十字架の下にひれ伏し、跪き、十字架に自らを結びつけ、服従させ、死に、涙、鼻水、衣を破り、灰をかぶりながら祈ることを続けていかなければならないというのが、聖書が私たちに要求していることですね。
とて、なんと難しい、やり続ける、やり遂げることが困難な要求でしょうか。
それでも、聖書が私たちにこれらを要求してくる理由は、ただ一つですね。
エペソ書５：１で見た通りです。
私たちが、愛されている神の子ゆえの要求だということです。

私の父は小卒で、学校で学びたくても学ぶことが出来なかったので、自分の子どもにはそんな思いをさせたくないと、本当に身を粉にして働き、その得た糧をもって愛する我が子たちを学校に送り、学ぶ機会を与えてくれました。
ところが、父の子どもであった私にしてみればしんどいことだらけで、「もう嫌だ」と思うようなこと数知れずでしたが、でもそれが祝福でした。
神さまは今、私たちをご自分の子として呼び出し、ご自分の子に相応しく造りなさるために、その霊的訓練の場、霊的学びの場へと送り出して下さっています。

しんどいと思うこと数知れずだと思いますが、祝福ですね。

旧約聖書のヨブ記のヨブは、一日にして、家族を失い、財産を失い、健康まで失いました。
そして、その嫌な事、筆舌に尽くし難い痛みや苦しみの中でもがきながら、「何か悪いことをしただろうか。ああすれば、こうすれば、こんなことにはならなかったのだろうか…　どうすれば、この状況をいち早く打破し、通り過ぎることが出来るのだろうか。神さま、良く分かりませんが、とりあえずお赦し下さい。もう触れないで下さい」と訴えましたが、神さまのご介入は、神様が望んでおられる結果が出るまで導かれました。
お米を炊く時、または、豚骨から美味しいスープを炊き出す時、２０分、３０分と時間を決めて火にかけるのではなく、ちゃんと米が炊ける時まで、ちゃんと美味しいスープが出尽くすまで火にかけます。
神さまもそうですね。
ヨブの言葉を借りますと、「唾を飲み込む間も、私を放っておかれない」神様です。
結果を出すまでですね。
神の子たちに望んでおられる結果、実りを出すまでですね。

苦しみを除くことが神様の目的ではなく、痛みを取り除くことが神様の目的でもなく、神が望んでおられ、そうなった時には、私たちも必ずや喜びに至るだろう神の子に相応しく造りかえるところまで、私たちを連れて行かれます。
もちろん、私たちの悪さや失敗によって招いてしまったことも多々あると思いますが、神のうちにあっては、「たられば」も偶然もないですね。

神の御子イエス・キリストを十字架に架けるほどに、私たちを愛された神様は、私たちを主イエスのように、他者を隣人を愛したい、愛する者へと、愛し合う者へと造り変えなさるその御手を休まれることはないですね。
ゆえに、私たちの葛藤、苦しみ、失敗、挫折は、葛藤、苦しみ、失敗、挫折で決して終わるものではなく、神の子という実りを、完全という実りを実らせて下さるでしょう。
これが、私たちの信仰です。
私たちは、エペソ書５：１、

エペソ人への手紙５：１（パワポ）
ですから、愛されている子どもらしく、神に倣う者となりなさい。

という御言葉が私たちの身の上に成就されて行く過程の中で、以前には見えなかったものが見え、以前には聞こえなかったものが聞こえ、以前には分からなかったものが分かるようになってきたでしょうし、これからもっとそうなっていくんだと思います。

そして、なおも神さまは諦めることなく、この御言葉を私たちの身に成就させるために、何かを引っ剝がし、何か切り捨て、また何かを丈夫にしながら、私たちを「愛されている子どもらしく、神に形どられた者」へと、「神の愛を前にしたら、実のところ敵なんかいないんだ」ということを悟らせながら、誰かを愛する者へと変えていって下さるでしょう。

Conclusion

最近また結構な夫婦喧嘩をしたのですが、私が妻に、「君は、悪いところがどこも変わってないよね！　昔からどこも変わってないじゃん。でも、僕は変わったよ！」と、とんでもないことを口にすると、「何言ってんの！　あんたこそ、全然変わってないどころか、昔より遥かに悪くなってるじゃない！　あなた、何様のつもり！」と返されました。

互いに、相手のことがムカついてムカついて仕方なかったのですが、主の恵みの内に冷静にされてみると、ちゃんと私たち夫婦二人とも、主の恵みの内に一進一退かも知れないけれども、ただただ主の愛と恵みの内に変えられていることに気付かされます。

人のことを言っている場合じゃないくらいに罪人で、それでも、人を羨んでいる場合じゃない程に祝福を受け、愚痴っている場合じゃない程に確実な約束の中で生かされ、躓いても、倒れても、失っても、傷ついても、「時に適って美しい」と確実に告白出来るようなところへと導かれ、以前は見えず、以前は聞こえず、以前には気付け得なかったことに気付けるようになったという変化に気付かされます。

もっと神様を直接的に求めたい、聖書の御言葉が美味しくて仕方ない、イエス様にあって救われたということ以上の出来事はないということが、以前よりも、広く深く高くされていることに気付かされます。

どんな状況にあっても、どんな立場にあっても、苦しくても、痛くても、最終的な挫折で終わることはなく、私たちに起こるそのすべてのことは、私たちにとって益であり、成長であり、父なる神が完全であるように完全であるところへと至るようになっているということを、以前よりも分かるようになっていることに感謝を覚えます。

私たちが、愛することを求められているのは、無理難題を突き付けるためではなく、神の子であるがための特権であり、自慢であり、喜びであり、祝福であり、光栄であることを覚えて、感謝するしかありません。

神は、私たちを神に倣う者とすることを諦めなさいません。
ならば、私たちも諦めない者でありたいと願います。

お祈りいたします。
祝祷：エペソ５：１